

# 映像から学ぶ精神障害者の病いの体験

篠原由利子

## 〔抄録〕

精神保健医療福祉領域にあって、当事者の心理・社会的支援を深めていく視点として不可欠なものが生活者の視点であり、障害特性（生活のしづらさ）であることは言うまでもない。疾患や障害が医学的記述やチェックシートによって計測され、計量化される時代において、福祉支援は「生きづらさ」「付き合いづらさ」等々、生活面、人生面に及ぼす影響がどのようなものかという当事者理解はことさらに必要である。しかし体験を理解するのはなかなか難しいものである。当事者の体験記や教育教材も出版されつつあるが、この稿では映像（映画）による共感的理解の深まりの可能性を論じた。

キーワード：精神障害 体験としての障害 映像 精神保健福祉教材

## はじめに

某国立大学の医学ゼミで、精神医学教育の一環として映画を取り上げているという一文<sup>1)</sup>を読んだことがある。そのゼミではまだ2～3回生の医学生達が教員の作った10本程度の映画リストを觀賞し、まず精神医学的理解を加えてのプレゼンテーション、ついでグループ討議、それらを経てレポート提出するというシラバスである。好評で満足度の高い、また精神障害者に対するスティグマの軽減につながる学びになっている、とその効果が述べられていた。

臨床現場で働いていた筆者は、精神障害の体験が言葉では表現しきれないほどの苦悩に満ちていること、喪失が幾重にも重なりあうこと、しかしながらそういった体験はあまり一般的には理解されていないことなどがこの領域の課題の一つであると考えてきた<sup>2)</sup>。例えば統合失調症を病む苦しみは、自我を脅かす症状から始まり、加えて入院治療の環境、滞る社会・人間関係の問題、長期にわたる通院や服薬、回復後の生活の再構築の困難さなどなど幾重にも連なる。人権侵害等も含めて喪失するものが多すぎるのである。精神障害に関しては新聞報道やテレビドラマ、一部の読み物などが確かにそのある一面をとらえてはいるが、当事者に寄り添った理解を深める切り口は少なく、興味本位のもの、時には不安を掻き立てるものすらある。また最近では当事者の意識の高まりから手記や体験発表にふれる機会は増えたが、やはりこれも関心のある人でないとアクセスは難しい。一般市民や精神保健福祉の初学生に精神障害、特に統合失調症の独特な体験世界をどう伝えるかはなかなか困難なテーマである。

筆者は、2～3回生向けの授業で、休暇の間に4～5本の映画の中から1本を選んで鑑賞し、

感想文を書いてくることを課題としている。学期が始まり、まず同じ映画を見た学生のグループを作って討議し、その意見交換を自分の感想文に反映させたレポートを提出するといった1コマのみの試みを10年以上続けている。この課題は学生からかなり支持を得ているが、更には学生のほうから是非紹介したいという映像、小説等が出されてくるので、教員推奨の作品と合わせ、数十本の作品リストを作成して配布している。ただし配布資料にもこの稿で取り上げる作品にも、映像教材、精神分析を題材にしたドラマ等は取り上げていない。

表1 精神障害を素材にした映像作品

映画タイトル	制作年	制作国	監督名	備考
シベールの日曜日	1962	フランス	S・ブルギニョン	PTSD・乖離性障害
アラバマ物語	1962	アメリカ	ロバート・マリガン	人種・障害者差別
カッコーの巣の上で	1975	アメリカ	M・フォアマン	精神科病棟
アデルの恋の物語	1975	フランス	F・トリュフォー	被愛（恋愛）妄想（実）
ムンク・愛の肖像	1976	スウェーデン デンマーク	P.ワトキン	アルコール依存症（実）
シャイニング	1980	イギリス	S・キューブリック	閉塞状況
レインマン	1988	アメリカ	B・レヴィンソン	自閉症
カミーユ・クローデル	1988	フランス	B・ニュイッテン	妄想（実）
死の棘	1990	日本	小栗康平	統合失調症（実）
レナードの朝	1990	アメリカ	B・マーシャル	嗜眠性脳炎
エンジェル・アット・マイ・テーブル	1990	ニュージーランド	J・カンビオン	電気ショック療法・ロボットミー（実）
妹の恋人	1993	アメリカ	J・チェチック	情緒不安定
ギルバート・グレイブ	1993	アメリカ	R・ハルストラム	知的障害・過食
午後の遺言状	1995	日本	新藤兼人	認知症
シャイン	1995	オーストラリア	S・ヒックス	統合失調症（実）
すべての些細な事柄	1996	フランス	N・フィリベール	精神科病院（ドキュ）
恋愛小説家	1997	アメリカ	J・L・ブルックス	潔癖症
真昼の星	1998	日本	佐藤 真	障害者アート（ドキュ）
17歳のカルテ	1999	アメリカ	J・マンゴール	思春期危機（実）
ビューティフル・マインド	2001	アメリカ	R・ハワード	統合失調症（実）
アイ・アム・サム	2001	アメリカ	J.ネルソン	知的障害
阿弥陀堂だより	2002	日本	小泉堯史	パニック障害（実）
オアシス	2002	韓国	イ・チャンドン	脳性麻痺
ヴァイブレーター	2003	日本	廣木龍一	幻聴・食べ吐き
きみに読む物語	2004	アメリカ	N・カサベデス	認知症
家の鍵	2004	伊・独・仏	J・アメリオ	発達障害
明日の記憶	2005	日本	堤 幸彦	認知症
ぐるりのこと	2005	日本	橋口亮輔	うつ病

博士の愛した数式	2005	日本	小泉堯史	高次脳機能障害
やわらかい生活	2006	日本	廣木龍一	うつ病
*精神	2008	日本	想田和弘	精神科診療所 (ドキュ)
*人生、ここにあり	2008	イタリア	J・マンフレア	バザーリア法
*むかし Matto の町があった	2012	イタリア	M・トゥルコ	脱施設化
わが母の記	2012	日本	原田真人	認知症

(筆者鑑賞作品の中から作成。表中(実)は実話に基づく作品、(ドキュ)はドキュメンタリー作品)

まず映像を選ぶにあたって、精神障害の体験の質・内容の分類を試み、3つの領域に分けた。まず精神科医療につながり、治療するために過ごす施設の物理的、環境的体験が理解できる映像を4本、次に精神障害を有しながら自分らしく生きる人生を描いた作品を2本。最後に精神病症状の生の体験を追体験できる映像と考えられる作品2本を取り上げる。

## 1. 精神科医療につながり、入院して過ごす施設での物理的・人的環境の体験

### ①「カッコーの巣の上で」(原題: One Flew Over the Cuckoo's Nest)

監督: ミロシュ・フォアマン アメリカ 1976

<解説とあらすじ>

「刑務所の強制労働から逃れるため精神異常を装ってオレゴン州立精神病院に入ったマクマーフィは、そこで行われている管理体制に反発を感じる。彼は絶対権力を誇る婦長ラチェットと対立しながら、入院患者たちの中に生きる気力を与えていくが……。60年代の精神病院を舞台に、体制の中で抗う男の姿を通して人間の尊厳と社会の不条理を問うK・キージーのベストセラーを、チェコから亡命してきたM・フォアマンが映画化した人間ドラマ。」(DVD解説文より)

無頼の主人公が精神病患者を演じてもぐり込んだ精神病院で体験したのは、患者を最下位に置く絶対的権力構造であった。医師は患者の日常にはほとんど無関心であり、患者はいずれも無気力に陥っていた。病棟内のグループワーク場面で興味深い。婦長以下職員たちはいかにも民主的な運営を行っているような表情で促す。「何でもよい、あなたの意見を言って下さい」と。しかしながら殆どの意見は医学的、管理的、慣習的な理由によってただちに却下される。患者たちが規則に縛られ、人として認められていないことに反発を感じたマクマーフィーは持ち前の粗雑さで他の患者を巻き込み次々と禁止事項を破っていく。患者達はその新鮮な体験を通じて忘れていた自分らしさを取り戻していく。しかし病棟管理上それは喜ばしい変化ではなかった。ついにマクマーフィーにある懲罰的処置(ロボットミー)がなされる。学生のグループ討議でいつも意見が分かれるのが最後の場面である。ネイティブアメリカンの無口な大男のチーフが表情も反応もなくなったマクマーフィーの顔に枕を押し当て、窒息をさせて病院を脱走していく。学生の意見は分かれる。「ずっとからかわれていたのが恨みを晴らした」「マクマーフィー

の人間としての尊厳を守った」「自分が追われるのを遅らせるための犯行」等々。なかなか興味深い。

フォアマン監督には祖国チェコスロバキア（当時）からアメリカに亡命してきたという経歴もあるので、この映画は必ずしも精神障害者を意識して作られたのではないかもしれない。社会主義政権下での政治状況を、精神病棟における管理的支配や、自由の剥奪等に投影しているようにも読み取れる。さらに当時のアメリカはベトナム戦争による影響が様々な分野で影を落としていた。いずれにせよ、強制的収容や集団的処遇における「被収容者」と「専門職」との階層化を巡る弊害については鋭い描写だと思われる。社会学者ゴッフマンが『アサイラム』<sup>3)</sup>で述べているように、「精神病院の院内患者は慣れ親しんできた確信・充実感・防衛をきれいに剥ぎ取られ、かなり徹底した無力感にひしがれる経験をする。さらに共同生活や階級化された人間社会を覆う権威に曝され、屈辱を味わわれることが多い。精神的経験をするその間に、院内患者は＜病棟システム＞の枠内で自己を定位することを習得する。」「彼が受けるいろいろな制約や様々の剥奪は治療の意図的部分であり、彼に必要な部分であり、従って彼の自己が陥っている状態を表しているものなのだ。」と述べて、疾患とはまた別の、しかし疾患を有するが故の様々な要因が入院患者の自我や自尊心、本来の自分らしさなどを失わせていくと述べる。これはホスピタリズム、あるいはパターンリズムへの警鐘である。この映画はまさにそういった閉鎖病棟の物理的、階層的構造を描き、一方で無力化している患者をも描ききって秀逸である。

## ②「むかし Matto の町があった」(原題 C'era una volta la città dei matti)

監督：マルコ・トゥルコ イタリア 2012 (TV 放映 2010 年 2 月)

＜解説とあらすじ＞

「(第1部) 1961 年、ゴリツィア県立精神病院長に赴任したフランコ・バザーリアは、小さな檻に閉じ込められていたマルゲリータに顔を近づけた途端、唾を吐きかけられる。独房のベッドに 15 年も縛り付けられているボリスを回診すると、屈強な看護師たちに取り押さえられたボリスの汚れた股間にホースの水が無遠慮に掛けられていく。バザーリアはゴリツィア病院の収容所臭さをなくすことに心血を注ぐ。こんなバザーリアの姿勢にマルゲリータもボリスの頑なな心も開かれていく。しかし県の行政当局は、病院外に精神保健センターを造ることにも、職員を増員することにも反対する。そこに外泊した男性が妻を殺める事件が重なって、バザーリア院長は病院を追われてしまう。」

(第2部) 「1971 年、トリエステ県代表(県知事)のミケーレ・ザネッティが、県立サンジョバンニ病院長になってほしいとバザーリアを口説き、バザーリアは「白紙委任状」を条件に、院長を引き受ける。やがて病院は縮小されて、代わりに 24 時間オープンの中核の精神保健センターに機能が移されることになる。1978 年、イタリア中のマニコミオ(精神病院)を廃止する新しい精神保健法(180 号法)が、国会ほぼ全会一位で成立。マルゲリータもボリスも、紆余曲折を経て、人間として復権を果たすのであった。しかし直後にバザーリアは、脳腫瘍で

死の床につく。」

(上映会のパンフレット及び180人のMattoの会ホームページ <http://180matto.jp/> を抜粋)

いろいろな意味で迫力のある映画である。1960年代の殺風景なイタリアの精神病院の構造、収容の様子、治療と銘打たれた暴力的ともいえそうな様々な処遇、患者と看護者の格闘などがリアルに描かれている。さらに加えてバザーリアその人が迫力のある精神科医師であり、一貫して自由と精神科閉鎖病棟廃止の信念を曲げることなく頑固なまでに突き進む姿勢がまた桁外れである。劇中のバザーリアのセリフには彼の強い気持ちが込められている。まず病院の廃止を懸念する行政官や大学の上司に向かっては「収容所である限り治療は成立しない」「(狂気)に対する不安を壁の向こうに追いやって済ませることは不可能」「犯罪者が出たということですべての人類が犯罪者とみなされるのか」という激しい口調で抗議する。そうかと思うと、患者ボリスの「苦悩が人をMattoにするのか、Mattoであることが苦悩を感じさせるのか」という問いかけには、「僕にも分らない」と率直である。彼が病棟を開放化していく上で重要視していたのが患者を含む病棟会議であった。最初は支持を得られないが、そのうち同僚や患者の協力で会議は何とか軌道に乗り始める。また殺風景な病室に私物を置くことも勧めていく。人形や写真、夢につながる紙幣、手細工の道具等々が一人ひとりの患者の、自からの人生と繋がっていく様子が温もりが漂う。そのことですべてが解決するわけではないが、徐々に病棟は変化していく。一方で開放化の途上で起きた不幸な死亡事件の様子もかなり丁寧に描かれている。事件の背景のみならず、登場する主要な患者の入院前の生活背景や個人的な苦しみ、家族の苦悩なども偏ることなく挿入されている。

ある雑誌<sup>4)</sup>では当事者が、「イタリアでは精神病院を廃止する方向へ大きく舵を切ったこの当時、日本では精神病院を増設していた。イタリア人たちが先進的な考えをしていたと思いがちだが、この映画をみるとバザーリア法に行きつくまでの困難な道のりが描き出されている。一時帰宅した患者に戸惑う家族たち、患者が地域に出てくることに困惑を示す近隣住民たち、患者を危険視して隔離することを正当化する守旧派たち、さらには患者の恋愛やセックスまでが問題視される。日本の課題と変わらない。そう考えるとイタリアにできて、なぜ日本にできないのか深く考えさせられる」と述べており、筆者も全く同感である。

日本では「180人のMattoの会」という組織が2012年から各地でこの映画の上映活動を行っており、筆者もその集まりで鑑賞することができた。

### ③すべての些細な事柄 (La Moindre Des Choses)

監督 ニコラ・フィリベール フランス 1996

<解説とあらすじ>

「高名な哲学者、故フェリックス・ガタリと精神科医ジャン・ウーリーが1953年に設立したフランスにある独特の治療法で知られるラ・ボルドでは心を病んだ人たちが静かに暮らしている。緑に囲まれた広大な敷地を有するラ・ボルドは、いわゆる精神病院とはだいぶ様子が違う。



塀や壁もなければ白衣を着た人もいないし、病院然とした寒々しさもない。恒例の夏の上演会には、ラ・ボルドの住人（患者、看護人、医者）が一緒になって参加する。稽古は屋外で木漏れ日を浴びながらゆっくり行われる。映画を見ているだけでは誰が患者で誰が医者かほとんど見わけがつかないし、説明もされない」（映画パンフレットより）

美しい映画である。古い城館を病院に転用しているようで、緑の樹木に囲まれ、自然環境も素晴らしい。本人として出演する患者たちはそれぞれに存在感があり、芝居や役割に取り組んでいるように見える。パンフレットや手元にある文献<sup>5)</sup>によるとラ・ボルドでは1950年代開設当初から“制度論的精神療法”と称される病院運営を実践していたようである。

高橋によると<sup>6)</sup>この実践は精神医療刷新運動つまり治療共同体の概念であり、集団における役割意識の獲得、情緒の重視、問題を先送りしない事、治療者—患者という上下関係が洗い直され、患者も病棟運営に参加するなど、治療組織のあり方を問うことに主眼が置かれているという。

1970年代に日本の精神科医療領域においても病棟開放化と治療共同体の試みは各地でみられた。筆者の所属していた総合病院精神科はまさにその取り組みを行っていた。イギリスのM・ジョーンズの実践は勉強したが、後に著名となる思想家等がサントルバンという小村で行っていたフランスでの実験的な実践のことは全く知らなかった。この病院運営が臨床の治療というより、むしろ思想的な実験であったことは考慮されるべきであろうが、この映像を見る限り、患者や職員はユニホームや名札で識別されておらず、患者も職員も共に舞台にむけての準備に余念がない様子が淡々とスケッチされ、そこを流れる時間は緩やかである。しかしながら穏やかであるだけに、施設内適応ではないかとの疑問も禁じ得ない。インタビューを受けて監督はラ・ボルドの治療概念は薬に限られておらず、患者一人ひとりのアイデンティティや特異性を守りながら一緒に生きていこうとしているのだと強調する一方で、薬剤室で分包される鮮やかな色の大量の向精神薬にカメラを向ける事も忘れていない。まさにドキュメンタリー監督のまなざしである。

#### ④「精神」

監督 想田 和弘 アメリカ・日本 2008

<解説とあらすじ>

「『狂気』とは？『正気』とは？心の傷に包帯は巻けるのだろうか？『精神』は精神科にカメラを入れ、その世界をつぶさに観察。「正気」と「狂気」の境界線を問い直し、現代の精神のありように迫った。同時に心に負った深い傷はどうしたら癒されるのか、正面から問いかける。」  
「ここにある、病。ここにある、小さな光・・・外来の精神科診療所「こらーる岡山」に集う様々な患者たち。病気に苦しみ自殺未遂を繰り返す人もいれば、病気とつきあいながら、哲学や信仰、芸術を深めていく人もいる。」（DVD解説から）

カメラは数か月にわたって、こらーる岡山に密着している。カメラは診察室、グループホー

ム、支援センター等、古びた施設や敷地をめぐる。物理的な施設は画面から見ていかにも古そうである。しかし穏やかな日差しや風がまぶしいし、白衣を着ていないスタッフが笑顔を見ているし、仲間は寝転んだり、談笑したり、タバコをぶかぶかふかしたりしている。木々に囲まれた街と地続きの平屋の民家の様な診療所が、地域で生きていく時の休息所、時に悩みを持ち込む相談支援の場所、仲間に会えるスペースとして当事者にとってかけがえのない場所であることが伝わってくる。彼らの気持ちを汲んでくれる主治医との診察室での短い会話がこの上なく支えになっていること。寝ころび、タバコを吸い雑談のできる場がゆったりとやすらぎの空間になっていること。さらに当事者の自宅ではホームヘルパーとの料理や掃除という日常的な営みが映し出され、そうした他者とのかわりを通じた実質的な生活場面が説得力をもっている。にもかかわらず診察場面でも、ベンチに座ってのんびり話しているように見える人の口からも「死ぬこと」がよく語られる。それは例えば「死にたい」であったり「死ななければならぬのではないか」であったり「死ぬしかない」であったりして、「死」への想念が常に彼らの時間に覆いかぶさっている重さが伝わってきて痛ましい。

自らの壮絶な体験を、表情をほとんど変えずに語る当事者もいる。みている方が心配になるくらいの内容であるがカメラは視線をそらさない。質素な診察室では山本医師が大切にしている言葉が繰り返される。「あんたはどう思うんじゃ？」という問いかけと「つながっていけると違うか？」という言葉である。おそらくこの言葉にたどり着くまでの山本医師の臨床実践は誠実な営みであったに違いない。

彼らの主治医である山本医師とは以前シンポジウムのパネラーとして隣り合って発表したことがある。その頃山本医師は岡山県立精神保健福祉センターで地域を視ながら仕事をされていた。筆者が発表の中で、日曜日に当事者、家族、病院関係者、学生などが集まって精神科医療、地域活動に関する勉強会をしている事に言及した時、山本医師は暖かい言葉を投げかけてくれた。「病院の勤務時間だけじゃあ患者さんのことはわかりませんからね」「自分の時間を惜しまない姿勢はええですなあ」

出版された「精神病とモザイク」<sup>7)</sup>の中で山本医師は想田に語る。「＜目標＞その目標が親や社会から与えられた目標であったりして、自分自身の内とはつながっていないものだと問題ですね。本来的な自分というものは別の方にあるから、どうしても無理がありますな。」「＜主体性＞薬に関しては、病気の状態、悪循環がどんどん進んでいっているという状態に対しては有効だと思うのですが、しかし回復を含めて本当にその人らしさを取り戻すのには効かなくてね。今おっしゃったような、生き方を含めて自分がもう一回、自分自身を整理したり見直していくチャンス、心の病気（に）その意味は大きいと思うんです。その時に薬だけでなく、人間が必要なんだと思います。いろんな体験をしたり、いろんな考えを持った人が、その人の周辺にあって出会える、という状況が大事なんだと思います。」「＜入院＞本人の目的でない入院ですな、目的がわからない、現在の危機的状況から単に逃れると、そういう入院はやっぱりやめた

ほうがよいと。で少なくとも入院するのなら、入院する必要性についてしっかりと時間をかけて整理すると。「親のため」「近所の不安を解消するため」「恋人のため」・・・とか、そういうことはきっちりしてやっていくことが大事なんじゃないかと。同意ができない場合には周囲のものが本人にお願いすると。嫌だろうけど困っています、と。私達のためにお願いします、ということですか。」

モザイクをかけないで撮影に協力した当事者の感想も掲載されている。映画の冒頭に緩慢な動作で診察室に入り、辛いと訴え涙を流し、鼻をすする女性患者Mさんのこの映画に対する意見である。

「＜苦しみの伝え方＞ だけどどんな風に苦しいのか、どういう苦しみ方があるのかっていうのはあんまり映し出されていないような気がして。みんなそれぞれにこういう経験をして病気になったんですとは言うんだけど、その後の苦しみ方が、どういう風に苦しんで、一日一日をどんなに苦しい思いで暮らしているのかっていうのが、結局ぜんぜん映し出されていないのは衝撃でした。活字も読めない、音楽を聞くのも耳障りではないのかなとか、テレビもつけられない人がたくさんいるし。もうテレビがうざい。もううっとおしい。画像が目障り。みんな当たり前に行っていることが、私達は当たり前じゃない。そういう本当の苦しさっていうのを、やっぱりとってほしかったなああって。」<sup>8)</sup>

こうしてみると当事者の本当の苦しさを伝えることは敏腕のドキュメンタリー監督にとっても至難の業であることがうかがえる。しかし別の場面では公開をためらうほどの内容の語りにひるむことなくカメラを回し続けるのである。診察室でも「死」を語り自宅を公開した60代くらいの男性の顔に見覚えがあった。その男性は1993年に当時のぜんかれんから出版された当事者の体験記<sup>9)</sup>に手記を載せた岡山県のYさんではないか。45歳のYさんの写真を見ながら彼の長い精神障害者としての時間に思いをはせた。しかし映像に映ったYさんの顔には長い間真摯に生きたことを物語る深い、確固とした表情があった。

## 2. 精神障害を有し、困難な状況にありながらも自分らしく生きていく人と周囲の人を描く

### ①「エンジェル・アット・マイ・テーブル (An Angel At My Table)」

監督 ジェーン・カンピオン ニュージーランド 1990

＜解説とあらすじ＞

「繊細な感性を持つ赤毛の少女ジャネットの、傷つき悩みながらも大人へと成長していく姿を描く。ニュージーランドの作家ジャネット・フレイムの自伝的小説『ある自伝』3部作が原作。

ニュージーランドのサウスアイランド。1924年8月双子の姉妹として生まれたジャネットは、もじゃもじゃ頭の赤毛の6歳の女の子になっていた。ジャネットは片時も本を放さない少女で15歳の頃には、ロマンティックなものに憧れ、将来は詩人になろうと心に決めていた。姉マートルの死、戦争の勃発などを経て18歳になったジャネットは、教師を目指して師範学校へ進



むことになる。学校でフォレスト教授に出会い、文才を認められるが、大勢の人間の集まるところが苦手なジャネットは、監察官が参観する授業で極度の緊張のあまり教室から抜け出してしまい、絶望感に襲われ自殺未遂を計る。フォレスト教授の紹介で精神科病棟に入院するが、精神分裂症と診断され、精神病院に送られる。その間も彼女は必死で執筆を続けるが、八年間に200回ものショック療法を受ける。さらに母親の同意のもと、恐ろしいロボットミ手術を受けるという寸前、彼女の短編集「礁湖」が文学賞を受賞したためにそれを逃れ、やっと退院、自由な文学活動ができる平穏な日々を獲得する。そして文学基金からヨーロッパ滞在の奨学金を得た彼女は、初めてニュージーランドを離れ、ロンドンで暮らすことになる。・・・(さまざまな経験の後) 自らの意志で病院へ向かった彼女は、精神分裂症ではないとの診断を受け、病いの呪いから解放される。」(公式ホームページから抜粋)

映画では純朴でいかにも不器用そうな少女時代と、繊細で思いつめる様子の青春時代が愛情をこめて描かれている。教育実習の研究授業の時、彼女は黒板に向かって何も語れず、書けず、立ち往生してしまう。見ているこちらまで息がつまりそうな場面で、彼女は逃げるように教室を出てしまい、もう生きていけないと絶望する。その後更なる不運が重なる。口下手で自己主張がうまくできないまま精神科病院に入院させられてしまうのである。J・フレイム研究<sup>10)</sup>から紹介すると、彼女は20代の大半を精神病院で過ごし、退院後逃れるようにイギリスに渡り、あしかけ8年滞在して、失われた自己のアイデンティティ追求と作家として自立する道とを模索したという。そのためかフレイムの文学は「狂気体験」を抜きにしては語れない。結局自ら求めた再度の診察で統合失調症の診断は誤りだったとされ、やっと穏やかな生活が送れるようになる。映画の最後、姉の家の敷地内でゆっくりと、幸せそうな面持ちで本を手にとるジャネットの姿が目には焼きついている。J・フレイムは高齢に至るまで創作を続け、先年亡くなったが、オセアニア初の女性ノーベル文学賞候補者として名前が挙がっていたという。

## ②シャイン (原題 Shine)

監督 スコット・ヒックス オーストラリア 1996

＜解説とあらすじ＞

「ピアノの天才少年と呼ばれ、一度は精神を病みながら、ハンディキャップを越えて復帰した実在のピアニスト、デヴィッド・ヘルフゴット (1948 —) の半生を基に描く感動の音楽ドラマ。監督はドキュメンタリー出身のスコット・ヒックス。ピアノ演奏はヘルフゴット自身によるもの。デヴィッドは音楽家になれなかった父ピーターから英才教育を受けて育った。父の反対を押し切って、ロンドンに留学したデヴィッド。だが父との対立から、彼は精神を病んでしまう。」(allcinema 解説より)

かなり以前のことになるが、来日していたヘルフゴットのピアノコンサートをテレビで見たことがある。舞台そでから小走りにピアノの前に出てくるやピタッと立ち止まってお辞儀を数回する。そのぎくしゃくした様子は少し子どもっぽかった。だが演奏に入ると彼は豹変する。

時おり顔を観客にむけ、魅入られたような表情で演奏に没頭していく。ピアノを弾くことがまるで天命でもあるかのような熱演なのである。そんな彼だが精神病院への入退院を繰り返し、演奏から離れざるを得ない時期が続いた。彼の病名は不安神経症あるいは統合失調感情障害といわれている。小康を得てのち知り合いの助力でピアノ演奏の機会も得られ、さらに年上の女性ギリアンと知り合って結婚する。このことから彼は落ち着きと自信を取り戻したようだ。そして12年間のブランクのあと遂にコンサートピアニストとして復活するのである。

この映画を見た時に強く感じたことは、厳しい男性原理と、おおらかな女性原理との対比である。強圧的な年上の男性（厳格で型にはめたがる父親、そして完全主義の教師パーカー）の前では恐慌発作を起こし、普通でいられなくなる彼だったが、折々に出会った3人の女性との生活の中では安らぎを得て、徐々に自分を取り戻す様子が描かれている。このことは精神障害者との関わり方、また精神療法という観点から何らかの示唆があるように思われた。

ヘルフゴットは数回にわたって来日演奏会を行い、その様子はNHKの福祉系番組でも放映された<sup>11)</sup>。今も不安発作があるようだが厳しい練習は欠かさないので「ピアノを弾かない自分は生きているとは言えない」と断言もする。長きにわたって闘病を続ける彼が、家族や師よりも彼を愛する友人や周囲の人によって救われ、自分らしく生きている姿が印象的である。

### ③「人生ここにあり」（原題 SI PUO FARE）

監督 ジュリオ・マンフレニア イタリア 2008

#### <解説とあらすじ>

「1978年、イタリアでは、バザーリア法の制定によって、次々に精神病院が閉鎖された。『自由こそ治療だ』という画期的な考え方から、それまで病院に閉じ込められ、人としての扱いを受けていなかった患者たちを、一般社会で生活させるために地域に戻したのである。本作はそんな時代に起こった実話を基に、部隊を1983年のミラノに設定して誕生した。1983年、活気あふれるミラノ。新しく制定されたバザーリア法により、精神病院が閉鎖されたが、戻る場所のない元患者たちは、病院付属の「協働組合180」に集められていた。一方、労働組合員のネッロは、正義感が強く、労働の近代化や市場に対して情熱を傾ける熱血男。「協働組合180」にやってきてそこで目にしたのは、慈善活動をしながら無気力に日々を暮らす元患者たちであった。ネッロは施しではなく、仕事で稼ぐことの素晴らしさを彼らに伝えることを思い立つ。早速、組合の制度に基づき、みんなを集めて会議を開くも、個性豊かな元患者たちは、バラバラで全く会議とは言えない状態に。周りの人々は、この組合が市場へ打ってでるなど単なるたわごととしか映らない。特に、監督医師であるデル・ベッキオは、元患者たちが仕事の重圧に耐えられないと、この試みを即刻中止するようネッロに圧力をかけてきた。精神病に対して革新的な考えを持つフルラン医師に出会い、彼の助言を得てさらにもう一步踏み込んだ行動に出るべきだと確信する。それは、患者たちを虚脱状態にする薬の量を減らすことだった。ところがデル・ベッキオはそれを会えなく却下する。精神的な病は死によってしか完治しないもので、安定剤

は必需品だというのが彼の持論だった。」(日本公開時 映画パンフレット 2011より)

映画のはじめ頃には精神障害者の集団としか目に映らなかった複数のメンバーたちが、ストーリーが進むにつれて、その個性を輝かせ始める。その前では熱血漢の主人公のネッロの個性すら薄らぐほどである。メンバーそれぞれがみせるしつこいほどのこだわりや強烈な誇大妄想も、その人の味、人となりとして映し出されてくる。これは臨床で当事者に関わった人なら納得できることであるだろう。妄想も、奇妙な癖もひっくるめてその人なのである。収容施設にありがちな矯正や従属をネッロはメンバーたちに強くない。さて自分達の仕事が定まり、評価されるにつれて、彼らはネッロとその仲間といった方がふさわしい協働関係を築いていく。ついでに加えると、この事業を粘り強く続けるにはネッロの恋人の聡明な支えも不可欠であった。

### 3. 症状<sup>なま</sup>の生の体験 病的主観的体験をどう共感的に理解するか

#### ①ビューティフル・マインド (原題 A BEAUTIFUL MIND)

監督 ロン・ハワード アメリカ 2001

<解説とあらすじ>

「1947年9月、プリンストン大学院の数学科に入学を果たしたジョン・ナッシュ。彼の頭にあるのは『この世のすべてを支配する真理を見つけ出したい』という欲求のみ。ひとり研究に没頭するナッシュは次第にクラスメートからも好奇の目で見られるようになる。しかし、ナッシュはついに画期的な“ゲーム理論”を発見する。やがて希望するMITのウィーラー研究所に採用され、愛する人と結婚もしたナッシュ。しかし、米ソ冷戦下、彼の類い希な頭脳が暗号解読という極秘任務に利用され、彼の精神は次第に大きなプレッシャーに追いつめられていく……。」(DVD解説より)

この作品の目新しさは当事者が体験する病的体験(幻視や幻聴)をそのまま映像化しているところにある。この世界が主人公ナッシュにどう映っているのかがわかり、また周囲や身近な人をどうとらえているかを観客はナッシュと共に体験していくのである。こういった共時的体験は、幻覚や妄想が突拍子のないものではなくて、現実世界と裏腹に出現するものであると知らしめるのに有効である。ナッシュの妄想が彼の専門性や生きがいと分かちがたい関連性を有していることが説得力を持つ。暗号解読の秘密(と信じている)と、次第に追い込まれていく主人公の焦りや恐怖を共有しつつ理解することができる。国家機密である任務に誇りと責任感を持っているがゆえに、妻にも誰にも追いつめられる苦しみを伝えられない。そんな彼の内面を観客は彼の身に自分を置いてみているからこそ、統合失調症との診断で病院に収容される場面は他人事ではなく痛ましい。繰り返される電気ショックの場面は彼の病や症状よりも、彼の人間性そのものを壊されるのではないかという不安さえ抱いてしまう。しかしこの映画の救いは治療者が敵役にまわるという陳腐な構図になっていないことである。実話だからであろう。彼を治療する精神科医ローゼンのセリフで観客は幾分救われる。「大切な人が死んだわけでも、

いなくなったわけでもなく、存在しなかったということは本人には地獄だ」。物語が進むにつれて画面は現実の人と幻想の人とが入り乱れるなど複雑になる。一般的に幻視より幻聴が多い統合失調症だが、現実の妻の姿を遮断するように目の前にルームメイトのハーマンや監督官パーチャーが現れ、彼に問いかける様子は、どちらを信じればよいのか混乱する複雑な病的体験を生々しく再現している。さらに服薬による数学理論研究の遅滞や妻との夫婦関係のきしみから止薬をし、再発してしまうエピソードも描かれている。事実ナッシュは30年間病に苦しんだといわれるが、病状が落ち着いてからも相変わらず幻覚はつきまとい、しかし「無視するようにしている」ことで影響を最小限にとどめられたという病的体験の迫真性をよく描いている。この映画は天才の挫折と栄光、あるいは夫婦愛というキャッチフレーズで紹介されることが多いが、むしろ精神の病いを病み抜く当事者や家族の悩みと苦闘、そして人間としての使命、また尊厳を守り通した実話として捉えるほうが適切であろう。

## ②サクリファイス（原題 Offret）

監督 A・タルコフスキー ソ連 1986

### <解説とあらすじ>

「その日は突然やって来た。核戦争で破滅した世界を救う奇跡は存在するのか。袋小路に入り込んだ現代文明社会に生きる人々に、巨匠タルコフスキーが遺したメッセージ。

今日はアレクサンデルの誕生日。娘夫婦と友人のオットーがお祝いに集まった。

神を信じないアレクサンデルに、奇跡は実在すると説くオットー。そこに突然、戦争で世界が破滅したというニュースが流れる。神に救いを求めるアレクサンデルに、オットーは使用人マリアの元へ行けと告げる。マリアは魔女で奇跡を起こす力があるというのだ……。東西冷戦のさなか、祖国ソ連（ロシア）に戻れなかったタルコフスキーが、北欧の島を舞台に、人類の破滅と救済とを描く。」（DVD 記載より）

作家柳田邦男が、精神疾患に苦しんだあげく自死を図り、11日間脳死状態にあった息子への鎮魂の思いを綴った著書「サクリファイス」の中に、息子の洋二郎氏（享年25歳）が残した文章が紹介されている。この文章は「サクリファイス」という著書のタイトルに直結し、なおかつ臓器移植をめぐる父が息子の意思を引き継ぐに至る契機にもなっている。洋二郎氏の手記から引用すると「アレクサンデルは、生命の樹を植える誕生日に、核戦争勃発の声をテレビで聞く。苦悩の果てに神を信じていなかったアレクサンデルが、この時初めて神にすがろうとする。主禱文を唱え、持てるものすべてを捧げますから救って下さいと彼は自分の言葉で祈りはじめる。自らの狂気をかけて愛する人々を救うために（サクリファイス＝犠牲）を実行する。アレクサンデルは郵便配達人オットーにすすめられ、バルト海をのぞむ島の白夜の中を魔女マリアのもとに行き秘蹟を求める。相擁する二人は空中に浮遊する。かくして奇蹟は行われ、すべてはあの穏やかな誕生日のままであり、明るい日が窓から射し込んでいる。だが、アレクサンデルは神へ「捧げ物」をしなければならない。こうして彼は愛する家に火を付け、自らは

精神病院に収容されることになる。・・・ろくでもない家族のためにアレクサンデルは祈った。』<sup>12)</sup>

映画の主人公アレクサンデルは自分の誕生日に異様とも言える体験に次々と見舞われる。自宅の中で起きる不吉な兆候、知人からほめかされる不思議な暗示、そしてテレビから放映される核戦争勃発の危機、彼は特別な能力を持つというオットーの暗示に従い、戸惑いながらも超越的体験を得る。さらにまた自分は神に救済を求め、宗教的召命を果たさねばならないと確信する。そして・・・。「サクリファイス」を鑑賞している我々は特別な位置にいる。というのは最初から画面の外側にいて、主人公アレクサンデルの主観的体験を共有できるからだ。従って彼の不安や極秘の行動、救済への願いと祈りの切実さ、核戦争が回避されたく、穏やかな世界へ戻ってきた時に取った行為の背景がわかるのである。しかし画面の内側つまり彼のすぐそばにいる家族などには彼の行為の意味が全く分からない。こうしてアレクサンデルの誕生日の一日は息子の身に起こる不安な啓示から、超越的体験を経て、ついに我が家に火をつけ、他人からは意味の分からない事を口走り、夕刻には精神病院送りになるという終焉を迎える。

ソ連（当時）の映画評論家はこの作品について「多くの突発事件が暗号化されて、ほめかしと参照のシステムに組み込まれている。信心家は、まず神に向けられたアレクサンデルの祈りを理解する。彼らにとって、この映画全体はこのテーマをめぐって展開される。そして最後に、定まった信念を持っていない第三の範疇の観客は、アレクサンデルが病気であり心理的に不安定な人間だと単純に結論を下す。』<sup>13)</sup>と解釈する。またある研究者は「サクリファイス」をして「映画がもたらすイマージュの全体は常に潜在的なものであり、隠された全体について観客に＜思考＞させることを目指す・・・」と述べている<sup>14)</sup>。

タルコフスキーの他の作品「惑星ソラリス」「ノスタルジア」の主人公（場合によっては彼以外の重要な登場人物）にも共通の苦悩がある。彼らはいずれも何らかの使命（救済がモチーフか）を帯びており、その遂行のために赴いた場所で、避けようのない困難な状況と、自らの問題（内的葛藤）との間で厳しい対峙を迫られる。それは「人はこの孤独のなかで過去の過誤や罪業と対決する審問の場に立たされる。』<sup>15)</sup>ようであり、また「こうして、生活上の立場や、人生の道の選択、そして人生における重大な行為の遂行が「乖離」し、「粉々の鏡」に映る像となってしまった状況のなかで、人間存在の境界と基盤もまた開示されるのだが、それを捨てれば、人間は、自らの人間性そのものを失う危険性を犯すことになる。』<sup>16)</sup>ストーリーである。

これらタルコフスキーの作品群は精神障害をメインテーマに作られたものではない。しかしながら複数の映画の主人公が体験する事態は統合失調症の幻覚・妄想などの精神病体験にも通じるのではないかと筆者には受け取られる。シートワの「タルコフスキーは、主人公がその生涯を主観的に体験するさまに関心を抱いていた。それゆえに彼は、主人公の夢や譚言は、映画においては、現実からのそのほかの印象とおなじように知覚可能な物質性をともなうべきであり、残りのエピソードから文体論的に切り離されるべきではない、と主張して



いた。<sup>17)</sup>という指摘は、幻覚・妄想状態ある当事者の心理・行動の理解の助けになるのではないかという思われるゆえんである。

## おわりに

精神障害、あるいは精神障害者理解になると思われる映像から、手に入りやすい作品を計8本取り上げ、解説やあらすじと共に検討した。精神障害は人生に影響を及ぼすほどの独特の体験からなっている。病的体験、精神科医療や施設と関わる体験、家族や一般社会との関係、自分を見失いがちな闘病体験等である。テキストや当事者の体験に加えて、共感的理解を引き出す教材として良質な映像を今後も推奨したいと考えている。

## 注

- 1) 小澤寛樹「Cinepsychiatry」精神医学 47 巻 2 号 2005 116  
選ばれた映画は、「ビューティフルマインド」「カッコーの巣の上で」「恋愛小説家」「17 歳のカルテ」「ES」「ファイトクラブ」「愛という名の疑惑」「ゆきゆきて進軍」「シャイン」「エクソシスト」の 10 本。
- 2) 篠原由利子「精神障害者の『病むことの体験』」2003  
「精神障害者の『体験としての障害』再考 佛教大学福祉教育開発センター紀要 2010 37-54
- 3) E・ゴッフマン 石黒毅訳「ゴッフマンの社会学 3 アサイラム—施設被収容者の日常世界—」誠信書房 1984 139, 155, 157,
- 4) 松尾 新「バザリア法成立までを描いた『むかし Matto の町があった』を観て」精神保健ジャーナル ゆうゆう 64 号 78-79
- 5) F. ガタリ・J. ウリ・F. トスケル・高江洲義英・菅原道哉・D. ルロ・市川信也「精神の管理社会をどう超えるか？」松籟社 2000
- 6) 映画パンフレット 高橋紳吾「静かなる 感動」ユーロスペース 1998 8
- 7) 想田和弘「精神病とモザイク」中央法規 2009 155, 166, 144-145
- 8) 想田和弘「精神病とモザイク」中央法規 2009 155, 166, 144-145
- 9) 全国精神障害者団体連合会準備会・全国精神障害者家族会連合会「こころの病 私達 100 人の体験」中央法規 2003
- 10) 塩田真紀子「ジャネット・フレイムと狂気」学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要 vol.4, 1995 71-80
- 11) NHK 福祉ネットワーク映像 障害者くらし情報「愛が病を癒してくれた」(2014.5.23)
- 12) 柳田邦男「犠牲(サクリファイス)わが息子・脳死の 11 日」文芸春秋社 1999 133
- 13) ネーヤ・ゾールカヤ 扇千恵訳「終わり」タルコフスキーの世界 キネマ旬報社 1995 238
- 14) 前田英樹「映画=イマージュの秘蹟」青土社 1996 145

- 15) ワジム・ミハーリョフ 西周成訳「タルコフスキーによる映画芸術の幻術的・形象的本質論」同上 355-356
- 16) ヴァチエスラフ・イワーノフ 桑野隆訳「時間と事物」同上 311
- 17) ヴェーラ・シートワ 大月晶子訳「魂の中心への旅」同上 205

（しのはら ゆりこ 社会福祉学部）

